

日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニューズ

2003年 秋号 No.32 (10月9日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 中野良顯

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX: 03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

2003年第1回学会賞授賞について	清水直治
学会賞を受賞して	高畑庄蔵
編集委員会より	真邊一近
出版企画委員会より	藤田継道
倫理委員会より	中島定彦
公開シンポジウム企画委員会より	望月 昭
財務担当より	坂上貴之
第21回年次大会を担当して	長谷川芳典
大会参加印象記	松井 進、大橋 智、三田地真実
学会情報 / 常任理事会ヘッドライン	中野良顯
学会情報 / 会員情報	事務局
前号訂正	NL編集部
編集後記	藤 健一

2003年第1回学会賞授賞について

学会賞担当常任理事 清水 直治

今年度から新たに設けられた日本行動分析学会学会賞(論文賞)および学会賞(実践賞)が、岡山大学を会場に開催された日本行動分析学会第21回年次大会において発表された。

日本行動分析学会学会賞(論文賞)は「わが国における行動分析学に関連する研究の促進及び発展を目的として、選考を行おうとする前年度に発行された「行動分析学研究」に掲載されたすべての論文を対象に、最も優れた論文1編に対して与えられる」とされており、第1回学会賞(論文賞)は、「行動分析学研究」第17巻第1号に掲載された望月要・佐藤方哉の両氏による共著である「行動分析学におけるパーソナ

リティ研究」に決定した。論文賞の選考は、規程により行動分析学研究の編集委員から3名、理事から3名、学生会員から3名、それ以外の一般会員から8名の合計17名の選考委員によって行なわれ、有効投票総数14票のうち得票数5票で望月・佐藤論文が第1位に選ばれた。選考理由を要約すると、「パーソナリティを行動分析学の視点から再定義をする試みと、行動分析学を完全心理学にするという将来的な展望という点におけるオリジナリティに意義がある。今後の研究の方向性を明確に示した点が評価できる」というものであった。

日本行動分析学会学会賞(実践賞)は、「現代

社会における課題を解決するために、行動分析学を応用して顕著な実績をあげ、会員の推薦を受けた実践のうち 1 個人または 1 組織に与えられる」とされており、第 1 回学会賞（実践賞）は、規程により選出された理事から 6 名、学生会員から 3 名、それ以外の一般会員から 6 名の合計 15 名の選考委員による投票の結果、有効投票総数 13 票のうち第 1 位は、得票数 9 票の高畑庄蔵氏（当時富山大学教育学部附属養護学校）による「生活支援ツールにもとづく知的障害者の養護学校や日常場面における多様な支援についての実践」に与えられた。選考理由をあげる

と「生活技能支援ツールの有用性の高さが、障害のある子ども達に対する教育実践をとおして実践された。日常場面で取り入れやすく、具体的な方法論を示した点が優れている」などというものである。

会期 2 日目に、学会賞（論文賞）並びに学会賞（実践賞）の授賞式が開催され、各賞ごとに賞状並びに賞金 5 万円が贈られた。その後に、受賞書による小講演が行われた（なお高畑氏については都合で参列できず、共同実践者である大村氏による代読が行われた）。

学会賞を受賞して

これからの特別支援教育：行動分析学のスタンダード化を目指して
高畑庄蔵（富山県立にいかわ養護学校）

このたびは日本行動分析学会実践賞という名誉ある賞を授与させていただくことができ、誠に恐縮しております。中野理事長をはじめ、関係の先生方に厚く御礼申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、現在療養中の身であります。そこでの体験です。私には二人の医師が医療に携わりました。一人は主治医でもある整形外科医の弟、もう一人は入院先の整形外科医です。私の MRI を見て、二人とも同じ診断をし同じ治療をするのです。医学というサイエンスが背景にあるからこそ、信頼して命を預けることができるのです。

ところで、障害児教育の場合はどうでしょうか。ひどい不適切行動のある子どもがいて二人の教師が支援するとします。その子のニーズをどう解釈してどのように支援するのでしょうか。残念ながら、解釈も支援もバラバラであると思われれます。

医者は、医学をもって治療に当たります。では、障害児教育、特にこれからの特別支援教育の携-わる教師は、何を持って多様なニーズに応

える支援を展開していくのでしょうか。

これからの特別支援教育では、思いつきや我流、今までの経験だけではとても対応できません。その背景となるべきサイエンスが行動分析学であると思うのです。

支援ツールは、手がかりツールと交換記録ツールにの二つで構成されています。手がかりツールは弁別刺激や刺激プロンプトと、交換記録ツールは強化マネジメントと対応しています。つまり三項随伴性にぴったりフィットしているのです。そして、教材教具や連絡帳といった現場の文脈にもフィットするよう開発した概念です。包括的な支援が求められている今日こそ、支援ツールは混沌とした実践現場で機能していくものだと考えております。

行動分析学はとても効果的です。だからこそ、多くの人々を幸せに導くという社会的・倫理的使命があると思います。行動分析学を特別支援教育のスタンダードにしたい。しかしなぜ、スタンダードにならないのでしょうか。スタンダードとなるための条件とは何かについて、今後

検討を重ねていくことが本学会に課せられた課題かもしれません。

編集委員会より

行動分析学研究 編集委員長 真邊 一近

新編集委員に編集業務が引き継がれてから、すでに半年が経過しました。「行動分析学研究」は、年に2巻の発刊を目標としています。新編集委員に課せられた最重要課題は、発刊の遅れを取り戻し、定期的な発刊を行うことにあります。今年度に入ってから、前編集委員のご尽力により前年度分の2巻が発行されました。残りの半年の間にさらに2巻を発行する必要があります。幸いにも論文の投稿が順調で、今のところ比較的楽観的な状況になりつつあります。

この半年間、新たに5編の論文を投稿いただき、その内の3編はすでに最終受理されています。前回のニューズレターでお知らせしましたように、新たに二人の編集補佐および、15名の編集委員をお迎えしました。その成果として論文を受稿してから最終受理まで比較的迅速な査読を行うことができています。一般的な投稿・査読課程は、1) 著者からの論文の送付、2) 論文の受領、3) 編集委員からの論文の受領通知の送付と査読者への送付、4) 査読、5) 査読者からの査読結果の送付、6) 査読結果の受領と可否の判断、7) 査読結果の通知、8) 原稿の修正、9) 論文の再送付、10) 2) から7)と同じ、11) 最終受理通知の送付 といういくつかの段階を経て最終受理に至ります。この間、何度も著者と編集部および編集部と査読者間で論文・文書のやり取りが行われます。郵便でこのやり取りを行うとどうしても1回につき数日の遅延が生じ、累積するとかなりの日

数になります。この遅延を極力短くするため、新編集委員会ではすべて e-mail で行っています。今のところ大きな問題も生じておらず、ほとんど瞬時に送受信が行われ、より迅速な査読が可能になっています。

査読で最も時間がかかる過程は、4) の査読者による査読そのものと、8) の著者による原稿の修正の2つの過程です。本来なら、著者が何ヶ月、場合によっては何年もかけて脱稿した論文を短い時間で査読を行うのはとても難しく、慎重にならざるを得ないのは事実ですが、新編集委員会では、受領後3週間というとても短い期間で査読をお願いしております。

会員の皆様のご協力のもと、これからも査読が早く、投稿から出版までの期間が短い「行動分析学研究」になるようさらなる努力を行ってまいります。皆様のご研究を査読の過程およびその結果として行動分析学研究誌上で拝見することを、新編集員一同楽しみにお待ちしております。

投稿を予定されている会員の皆様へのお願い

論文投稿規程には、電子ファイル(Text ファイルあるいはWord ファイル)の提出を要件に加えていませんが、上述のように迅速な査読を行うため、ご投稿いただく場合は、印刷された論文にFDあるいはCDに記録された電子ファイルを添えてください。もし難しい場合は、従来通り印刷した原稿のみお送りください。編集部で電子化します。

出版企画委員会より

普及書刊行委員会 担当常任理事 藤田 継道

普及書（啓蒙書）刊行委員会では行動分析学会の総力をあげて、一般大衆向けの行動分析学に関する普及書（啓蒙書）を刊行する企画を立てました。

近年、様々な心理学会がそれぞれに様々な資格制度を作ってきています。しかしながら、医師の国家資格と同様の心理学界統一の国家資格を作らなければ、医師会が作ろうとしている「医療心理士」の国家資格に先を越され、心理出身者の職を奪われることになる危険性があります。心理学の統一資格は「心士」、「心師」、「心理士」、「心理師」などとなるのではないかと考えられます。この、統一資格を支えるフィロソフィーは「科学性」であり、「因果性」であろうと推測されます。伝統的心理学では投入した独立変数の有効性を証明するために群の平均値の差を統計的に比較するという相関分析法が取られてきましたが、群間比較により得られた知見は個人の問題を解決する臨床にはほとんど役に立たなかったように思われます。個人（個体）の変化に及ぼす要因を同定する方法論を有しているのは行動分析学であり、因果関係を証明する方法論を有するこの行動分析学こそがこれからの科学的心理学の中心的役割を果たしていくものと考えられます。

しかしながら、ことはそう単純ではありません。世の中の人々は、心理学といえば「こころ」を研究する学問であると考えているように思われます。そして、心理学を専門に学ぼうとする学生の多くが「臨床心理士」の資格取得を目

指しているように見えます。こうした臨床心理士の資格取得を目指している学生の多くは、精神分析学を中心とするいわゆる人間性心理学に基礎を置く心理療法学を専攻する傾向が強いように思われます。

国の内外に山積する難問を解決するのに大きな力を発揮することができる心理学は行動分析学であると確信されます。しかしながら、世の中の人々も、心理学を目指す学生も「行動分析学」を余りよく知らないと思われま

す。新理事会では、行動分析学をもっと多くの国民に知っていただく努力をする必要があるのではないかと考えてきました。そこで、今の理事会の任期中に、(1)国民の多くに行動分析学がすばらしい科学的心理学であるを知ってもらう、(2)心理学を専攻する学生に、科学的な方法で社会に貢献する行動分析学の知識と技術を習得してもらうことを目的として、行動分析学に関する基礎情報を提供できる普及書（啓蒙書）「行動分析学入門（仮題）」（新書判）を刊行する企画をたてました。

書名：「行動分析学入門（仮題）」（新書判）

対象：一般、専門に進む前の心理学専攻の学部生

本書で取り上げるべき（取り上げたい）内容について、今夏の岡山大学で開催された行動分析学会第21回大会に参加された会員の皆様

に本書で取り上げたい・取り上げるべき内容に関するご意見をお聞きいたしました。急遽作成

したアンケート調査でしたので、不備もあろうかと存じますが、ご回答いただいた方々には厚くお礼申し上げます。調査結果は目下整理中です。結果がまとまり次第、ニュースレターでお知らせいたします。

今回のニュースレターに既にも実施したものと
同じ内容のアンケートを掲載いたします。よ
り多くの会員の方々のご意見をお聞かせいた
だくことができればありがたく存じます。なお、
調査項目は何人かの会員、非会員の方々のご意
見をもとに取り上げさせていただきました。歴
代の理事長の先生方にもご意見をお聞きして
おります。

ご回答していただく方にお尋ねいたします。

1. 年齢()歳
2. 性別(男 女)
3. 本学会会員(はい いいえ)
4. 職業()

本書のねらい・基本方針・内容等についてお
尋ねします。「はい」か「いいえ」かを で囲
んでください。また、ご自身が「執筆してもよ
いあるいは執筆してみたい」という項目は、
番号を丸で囲んでください。

5. 読者は大学受験生を含む一般大衆および専
門に分かれる前の心理学科の学生とする。

(はい いいえ)

6. 読みやすく、楽しい物語風の入門書にする。

(はい いいえ)

7. 心理学と行動分析学の存在意義・役割・魅
力・社会への貢献について述べる。

(はい いいえ)

8. 行動分析学の考え方、人間観、社会観を分
かりやすく解説する部分が必要である。

(はい いいえ)

9. 伝統的な心理学・認知心理学や精神分析学
の考え方・用いられている用語を行動分析学の
立場から解説していく。

(はい いいえ)

(例えば、認知心理学か行動分析学か、人間性
心理学(精神分析)学か行動分析学か、といっ
た対比で、行動分析学の特徴、違い、優れてい
る点等を述べていく)

10. 臨床心理学のあるべき姿・進むべき方向
性を述べる。(はい いいえ)

11. 心理学の資格の問題(乱立資格から統一
資格化と専門性への分極化)について行動分析
学 会の立場から見解を述べる。

(はい いいえ)

12. 行動分析学、応用行動分析学、行動療法、
認知療法、認知行動療法の説明、それぞれの異
動について説明する。(はい いいえ)

13. 行動分析学・応用行動分析学や行動療法
に対する批判とそれに対する伝統的心理学・認
知 心理学や精神分析学からの説明の問題点、
行動分析学からの説明の優れている点等を対
比 しながら述べていく。

(はい いいえ)

14. 遺伝と環境、認知、思考、言語、学習、
感情、発達、人格、などについての行動分析的
な 説明が平易にかつしっかりなされている
必要がある。(はい いいえ)

15. 行動分析学が役立つ分野・領域について
紹介する。(はい いいえ)

16. 「社会福祉の道を目指す人へ」、「教師を
目指す人へ」、「医学を目指す人へ」、「看護を
目指す人へ」等と言った章を設ける。

(はい いいえ)

17. 具体的に「教育系の学生のために」

18. 人間の日常行動・習慣・慣例・伝統・風
習・禁忌等を取り上げ行動分析学の立場から説
明する。(はい いいえ)

19. 日本が生き残るための施策を提示するこ
とを試みる。(はい いいえ)

20 人類が遭遇している困難な問題の解決策を提示することを試みる。

(はい いいえ)

21 若者達へのメッセージ

(はい いいえ)

小学生とその保護者へ(はい いいえ)

中学生とその保護者へ(はい いいえ)

高校生とその保護者へ(はい いいえ)

専門学校生とその保護者へ

(はい いいえ)

大学生とその保護者へ(はい いいえ)

大学院生とその保護者へ

(はい いいえ)

若い教師へ：保育所・幼稚園教師、小学校教師、中学校教師、高校教師、専門学校教師、大学教師へ(はい いいえ)

若い経営者へ(はい いいえ)

若い政治家へ(はい いいえ)

若い公務員へ(はい いいえ)

若いサラリーマンへ(はい いいえ)

若い親へ：父親へ、母親へ

(はい いいえ)

若いお年寄りへ(はい いいえ)

以下は、取り上げてみてはどうかと考えられる項目を羅列しておきます。取り上げるべきかどうかのご意見を、項目の前の の中に番号を記入することでお述べ下さい。また、ご自身が執筆してもよい(執筆してみたい)と思われる項目については、項目の前の の中に数字を記入された後、その を で囲んでください。

(5 .是非取り上げるべき、4 .できれば取り上げた方がよい、3 .どちらでもよい、2 .できれば取り上げない方がよい、1 .まったく取り上げる必要なし。)

心(こころ)とは何か、幸福とは不幸とは、物質と精神、富と名声、宗教、病気と健康、ホスピス、死、カウンセリングマ

インド、性格(人格、パーソナリティー)と占い、性格と血液型、受験戦争、不登校・引きこもり、いじめ、学級崩壊、非行・犯罪の凶悪化・低年齢化、エイズ、英雄・偉人の人生観解釈、進学・就職・結婚のメカニズム、企業の論理・生産性・利潤、日本が生き残るために「独創性を育てる教育」、ノイローゼ、鬱、神経症、心身症、統合失調症：心の病、フロイト・ユング・アドラー・ネオフロイデアン等精神分析学の効用と限界、チヨムスキーのスキナー批判、認知過程・イメージ・夢、気持ち・感情、結婚しない症候群、未婚・離婚によるシングルマザーと子育て支援、妻や子どもへの家庭内暴力(DV)・虐待、窓際族・リストラ・出向、ストーカー、教師のサラリーマン化、学級崩壊をきたす教師・きちんと授業ができない教師への支援、政治家のすべきこと・期待、戦争、テロ、生きがいと人生、産業構造の変換(重厚長大から軽薄短小)、もの作りから知的産業・情報産業への移行、競争(例 大学の法人化、学校と予備校、100円ショップ・99円ショップ・89円ショップ)、少子高齢化、老後の生活(お金、生きがい、健康と病気)、子育て支援、英会話学校がはやる理由、資格取得がはやる理由、対人関係(夫婦、親子、友人、恋人、職場、グループ)のトラブルを軽減させたり、うまくやるための対応策、ストレス対処、飲酒・喫煙、ダイエット、セルフマネジメントやセルフコントロール、「ペットのしつけ」

ご協力大変ありがとうございました。

倫理委員会より

倫理委員会 担当常任理事 中島 定彦

倫理委員会では、前倫理委員会からの付託事項を中心とした倫理綱領の改定を検討しています。それに先立って、まず、倫理問題を考えるための情報・資料の提供を会員の皆さんに対して開始したいと考えています。特に、前倫理委員会によって活発に行われた宿泊研究会・会合・シンポジウムの成果について、学会誌やJ-ABA ニュースなどを通じて、会員の皆さんにできるだけ公開し、倫理をめぐる諸問題の知識を共有していただくと同時に、現在の状況を理解いただくことを希望しています。

その一環として、前倫理委員会による2002年度事業報告をここに示します。以下の報告事項で指摘された諸点について、今期の倫理委員会の活動や倫理綱領改定に何らかの形で反映させる予定です。

[2002年度事業報告]

1. 会員より提起された「契約関係が存在しない場合における倫理問題」について倫理委員会で検討した。2003年度大会より、事例研究の発表に際して、発表者が被験者・クライアントの了解を得るように呼びかけ、倫理的手続きについての意識化を図るようにした。また、「契約関係が存在しない場合」の倫理規定を倫理綱領に加えることや、地区組織の整備とスーパーバイザー制度に関する検討を次期倫理委員会に付託した。

2. 会員より提起されたNHKスペシャル『奇跡の詩人』とFC問題に関する学会への申し入れに関し、倫理委員会で検討を行った。日本行動分析学会に対する誹謗・中傷・誤解・攻撃では

ないため、学会としては抗議行動を行わない。会員からのNHKに対する批判は書物『異議あり!「奇跡の詩人」』(同時代社)や雑誌『文藝春秋』(2002年8月号)に取り上げられており、その主張はすでに社会的に認知されていると考えられる。なお、この問題に関連して、応用行動分析による有効な治療を受ける権利を侵すような倫理的諸問題への対応について、次期倫理委員会に検討するよう付託した。

3. 常任理事会から付託された、インターネット上で「行動分析(学)」という言葉を使用することに関する倫理的問題について倫理委員会で協議した。インターネット上での、行動分析学(会)に対する誹謗・中傷を含む倫理的問題に対して調査し、対抗措置について検討した。しかし、具体的内容について例示することは倫理委員会の任を超えるものと判断し、(1)倫理委員会の報告に基づいて、常任理事会でインターネット上の倫理的問題の基準作りをすること、(2)その基準に基づいて、会員からの提訴を倫理委員会が審議すること、(3)それらの基準については、常任理事会のもとに特別委員会を設置すること、を常任理事会に提案した。

4. 2002年度大会で自主シンポジウム「行動倫理学に向けて」を開催し、倫理委員会3年間の学習の成果を発表した。このシンポジウムの成果として次の2点があげられる。(1)行動倫理学を「カウンターコントロール」という概念として考えていこうという出発点が形成された。(2)中野委員長長の報告により、「evidence-based」の考え方が取り入れられた。

公開シンポジウム企画委員会より

企画委員会 担当常任理事 望月 昭

公開講座学会シンポジウム企画委員会（企画委員会と略します）では、新体制の最初の企画として、8月5日の21回年次大会（岡山）の最終日に「『行動分析学』という授業で何を教える？」というテーマのもとにシンポジウムを開きました。最終日の最終時間にもかかわらず50名以上の参加者に集まっていただき、大変ありがとうございました。また、超多忙の長谷川芳典大会委員長にも貴重なコメントをいただきました。

この数年の間に、実践現場での広義の行動分析学の応用や普及については、本学会の会員の活躍で、教育・福祉・産業など様々な領域でめざましいものがあります。大学などでの行動分析学の教育もこれに対応したものが望まれるところです。そんな背景の中で、今回は、カリキュラムや授業技術といった方法の前に、まず、「何を伝え、聞き手の行動をどう変化させるか」

という目的に重心をおいて、佐藤方哉、藤健一、谷晋二の先生方に、現在の授業内容を紹介していただきました。

個人的な感想ですが、それぞれの方の持つ個性と魅力を感じると同時に、改めて行動分析学の「基本」に立ち返るということの重要性について身が引き締まる思いでした。大学教育の場面のみならず、実践現場における普及の際に、行動分析学のどの部分を強調し確認していくかということはこれまで以上に重要な課題になっていると思います。ファカルティ・デベロップメントというだけでなく、そうした実践的な観点からも参考になったというフロアからの感想もいただきました。

企画委員会としては、独自の企画を打ちたいと腐心しておりますが、会員の方からも、是非アイデアを募りたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

財務担当より

財務担当常任理事 坂上 貴之

先の総会で承認された決算と予算を御覧になると良く分かりますが、決算での大幅な今年度への繰り越し分は、基本的には「行動分析学研究」が発刊されなかったために生み出されたものであり、学会の財政は現在のところどちらかといえば赤字の状態、今までの繰り越し金を取り崩している状況です。もしも「順調に」雑誌が発刊されいけば、ここ数年の内に学会の財政が立ちいかなくなる事は確かだと思います。

新しい事業として、賞の設定や講演会の開催、論文の校閲等を財政的に支援してきましたが、新しい収入源の確保を考えねば、これらについても見直しが必要となってきます。取りあえずは会費の確実な納入促進と、支出の切り詰めを行っていきますが、皆様の御協力を仰ぐと共に、財政の好転に向けたアイデアを事務局までお寄せいただければ幸いです。

2003 年度予算

一般会計

単位(円)

収入の部		支出の部	
科目	予算額	科目	予算額
前年度繰越金	3,276,108	事務局費	778,000
年度会費	3,629,750	印刷費	3,360,000
過年度会費	167,500	刊行物郵送費	389,400
学会誌販売	30,000	学会事業補助費	600,000
広告代	30,000	編集委員会費	250,000
特別会計1より	569,601	会議費	490,000
		その他	246,000
		予備費	1,529,559
		雑費	60,000
合計	7,702,959	合計	7,702,959

特別会計1 (学会 20 周年記念事業積立)

収入の部		支出の部	
科目	予算額	科目	予算額
前年度繰越金	569,601	一般会計へ	569,601
合計	569,601	合計	569,601

特別会計2 (学生会員ABA派遣基金)

収入の部		支出の部	
科目	予算額	科目	予算額
前年度繰越金	509,418	学生会員ABA派遣費 (¥75,000×2人)	150,000
		次年度繰越金	359,418
合計	509,418	合計	509,418

第21回年次大会を担当して

大会委員長 長谷川 芳典 (岡山大学)

日本行動分析学会第 21 回年次大会は、8 月 4 日(月)から 8 月 5 日(火)の 2 日間、岡山大学創立 50 周年記念館にて開催されました。また、前日には、リハビリテーションのための行動分析学研究会との共催による公開行事を開催しました。

地方で行われた大会であるにもかかわらず参加者総数は 312 名(一般 173 名、学生 139 名)

と、年次大会の最多記録を更新しました。このほか公開行事のみに 21 名が参加しました。

最多記録更新は名誉ではありましたが、当日会員数が予想を大幅に超えたため、受付や会場設営上いろいろとご迷惑をおかけすることになりました。実際、大会 1 週間前の時点で、参加費を事前納入をしていただいた会員は、一般が 109 名、学生が 49 名、合計 158 名に過ぎません

でした。地元在住者を除けば、岡山大会に参加されるにはホテルの予約が不可欠のはずです。東京や関西地区での大会のように、前日になってから飛び入りで参加することは困難です。このことから、事務局としては、総参加者数は 200 ~ 220 名規模であろうとの予想のもとに、アルバイトを雇用し、会場の設営準備をしまいにしました。

この予測が外れた一因は、昨今の混沌とした大学内情勢にあるようです。ある理事は、校務により突然行かれなくなるというリスクが大きいことが事前納入を妨げていると指摘されました。学会不参加保険（校務で参加できなくなった時に納入分を支払う保険）でもあればよいのですが…。このほか、早期納入割引の期限を 5 月 10 日としたため、以後は事前納入しても何のメリットもない（むしろ振込手数料がかかるという）というルールにも問題がありました。大会開催前に予算規模と参加見込み数を確実に把握しておくことは、アルバイト雇用や座席確保など大会準備を円滑に行う上で不可欠です。今後、事前納入行動を高めるためにどのような強化を行う必要があるのか、名案を考え出す必要がありそうです。

さて、今大会は、伝統的な年次大会の形式を踏襲しつつ

- ・大会開催日前に、インターネットを通じて各発表者がより詳細な情報を提供したり質疑に感じられるような Web リンクサービス
 - ・研究以外の差し迫った諸問題について事前に討論するフォーラム
 - ・ポスター発表に対する大会発表賞の投票
 - ・大会終了後の感想文募集
- など新しい試みを導入しました。

インターネット重視策の一環として、今回は 2 号通信その他の連絡をすべて E メールで行いました。このことによる節約効果は絶大です。全会員あてに 1 号通信を郵送した時には、封筒を含めた印刷費、切手代などを含めて全部で 14 万円かかっており、これは参加者 1 人あたり 445 円の負担となります。2 号通信以下を郵送すればその 2 倍、3 倍の経費がかかったこととなります。

ちなみに発表論文集を全会員に郵送した時には 52 万円（参加者 1 人あたり 1673 円）かかっています。著作権の問題などもあり今回は抄録の Web 公開は見送りでしたが、このあたりをどうするかも今後の検討課題になると思います。

Web リンクサービス、フォーラムに関するネット上での事前討論、終了後の感想文募集などは全体として不活発に終わりました。もっとも、生身の人間が集うシンポジウムや口頭発表会場にあっても、活発に議論が行われることは稀です。せいぜい 4~5 人が発言し、時間切れで終わってしまいます。今回のフォーラムの 1 つ、「ネット時代における学会年次大会のあり方」でも取り上げられましたが、大会に参加するという行動が何によって強化されているのかを調べてみるのも興味深いのではないかと思います。なお、フォーラム討論のためのネット掲示板：<http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/JABA2003/plan/c-1.html> は、1 年程度は存続させますので、書き込みをぜひお願いします。また、今回掲げた「行動分析用語問題」、「心理学資格問題」、「ネット時代における学会年次大会のあり方」などのテーマにつきましては、理事会や次期大会で引き続き協議されますことを強く希望いたします。

大会参加印象記

「学会って楽しい?」

松井 進 (常磐大学大学院)

学会への参加を知人に話すと決まってこの質問が来る。学会は楽しいものなのかと自分に問いかけたとき、まだ胸を張って「楽しい」と答えられないのが本音である。学会発表では、自分の研究が他の人からどのように評価されるのか、また、他の人たちの研究はどのようなものかを知ることができる。懇親会では、その方達の様々な活動も知ることができる。そのような多様な機会を学会に参加することで体験する。これら全ての機会では何か一つでも楽しみを見つけて帰ろうと思う。これが学会へ参加する際に私が心がけていることである。

今大会では、自分にとって3回目となる学会発表を行った。これまで私は「行動に及ぼす言語の機能」に関する研究を行ってきた。今回の発表では、言行一致の形成過程における言語の機能を実験的に調べた結果を報告した。その発表での討論によって、言行一致に影響する変数として、言語の他に、行動に随伴する結果や社会的随伴性も考慮する必要性を実感した。その意味で、学会発表は新たな発見の場であり、また自分の成長を確認できる機会であると思う。今回の発表に関して言えば、自分の成長に歯がゆさを感じる思いがあったが、今後の研究の方向性を見出すことはできた。

シンポジウムやワークショップでは、応用研究の実情を知ることができた。理事長が御講演で紹介されたビデオ映像によって、対象者との関わり方や強化の仕方など、現場で研究することの大変さを知った。また現場における問題行動への介入法や障害者支援のあり方などを知ることができ、基礎的研究を主としている自分にはとても新鮮だった。

今大会ではこれまで行われていた口頭発表はなかったが、新たな企画がたくさんあった。特に学会賞や大会発表賞は、私達の今後の研究の励みとなるので、これからも続けて欲しいと思う。

学会へ参加することで様々な刺激を受ける。この経験から多くのことを学ぶことに学会の楽しみがあるのかもしれない。「学会って楽しい？」という質問に胸を張って「楽しい」と言えるように、学会で受けた刺激を大切に、もっと多くのことを学んでいきたい。最後になりましたが、今大会を運営された事務局の方々にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

「学会で出会う徒然」

大橋 智 (明星大学大学院)

時は夏の終わりの夕暮れ、ここは某大学心理院生室。登場するは、実験行動分析の〇ゼミ生(古)と応用行動分析の〇ゼミ生(瀧・大)の3人である。

大：あーもう夏も終わるなー。今年も夏休みなかったなー。¹

瀧：私は先週休んだよ。行動分析学会の帰りに、
とって挫折した讃岐うどんを食べてきた。
古：僕もけっこう休みはあった。

大：いいもんだ。旅行なんて、その岡山の行動

分析学会くらいなもんだよ。

瀧：でも、そこで観光したんでしょ。

大：岡山駅前で「うらじゃまつり²」を見物したのと、新幹線までの時間に、岡山城のお堀で、ボートを漕いだぐらいかな。男3人で1時間もボートなんて、二度とヤダね。

³

瀧：私は、シンポジウム⁴の準備で初日はそれどころじゃなかったけど。

古：長野の実家から車で高速を使って岡山に行

ったんだけど、7時間もかかったよ。⁵

大：ひゃー、遠いね。そういえば、2日目のポスター発表がえらいことになってたよね。

古：僕は、はじめての学会だったんだけど、人がいっぱいいてびっくりしたよ。

瀧：途中から会場が広くした対応の早さは、さすが長谷川先生って思うな。

大：ねえ、はじめての学会としては、どうだった？

古：名前しか知らなかった先生に直に出会えたり⁶、自分の領域の研究をしている先生や院生に出会えたこと⁷が、良かったかな。トイレで佐藤方哉先生とすれ違って緊張したりして。

瀧：そう！私もシンポジウムに憧れの浅野俊夫先生にいらしていただいて、ときめいたわー。

大：行動分析学会の面白みは、行動分析学を軸にして、自分の領域もそうだけど、普段あまり関わりのない領域の発表との「出会い」もあることだと思うんだ。いつも「なんちゃって行動分析」で過ごしているから、基礎の発表はホント勉強になるよ。今年のポスター発表は、若い院生の発表が多い感じがしたんだけど、そういった点でも気の引き締まる機会だったなあ。

瀧：シンポジウムで、杉山尚子先生からご指導をいただきながら発表して、データに裏付けて発表する大切さにあらためて気を引き

締めました。

大：僕らみたいな若い院生にもチャンスを与える行動分析学会は、よく思えばありがたいよねえ。そう考えると、この夏はたくさん「出会い」があったんだねえ。(しみじみ)

1 この夏の応用系0ゼミは、夏休みの約半分がセッションであった。これに校外実習や学会が加わるので、休みはなくなる。

2 うらじゃまつり
<<http://www.uraja.com/>>

3 数少ない娯楽の機会に寂しい限りである

4 自主企画シンポ「アメリカ・日本の行動分析学系プログラム紹介と留学事情」

<http://homepages.wmich.edu/~m2shirai/jaba_sympto/>

5 「古」氏は高速代をケチるため、軽自動車で岡山まで来たそうである

6 偉い先生にお会いするのを楽しむことは、学会のファースト・ステップだろう

7 仲間と出会えることも、また学会で得られる楽しみの一つ

Special Thanks to Ayano TAKIMOTO & Masanori KONO.

学会企画と新刊書： 岡山の年次大会に参加して

三田地 真実 (東京インターナショナル・ラーニング・コミュニティ)

『人生思い通りにコトを運ぶ法～快適な人生はこの「オペラント(道具的条件づけ)」がつくる』 久美沙織 三笠書房 2003年7月20日 1300円(税別)

折りしも、8月初旬に行動分析学会岡山大会が開催されるという数日前、近所の書店の「ビ

ジネスコーナー」で偶然見つけたのが、本書である。「オペラント」という題がふと目に止まり半ば懐疑的に中を覗いて見たところ、これは立派な「オペラント条件づけ」についての一般向け啓蒙書なのであった。プロローグには「行動主義心理学という新しい学問がありまして、

そこでは、こんなことを申します。【ある動物ヒトを含む一が、偶然ある行動をとった時、それに対する報酬が与えられると、その行動が生じる頻度が高くなる。行動が報酬を獲得する「道具」になるので、これを「道具的（オペラント）条件づけ」と呼ぶ】と強化の原理がきちんと述べられ、それに引き続き「ちなみに「頻度が高くなるようにする」ことを「強化する」といい、頻度を高くさせるような報酬を「強化子（きょうかし）」と申します」と要の用語の説明もきちんと提示されている。ところが、その次が「行動分析の専門書」とは全く違った展開となっている。久美氏が次々と示す具体例は「誰もが日常的に経験するような当たり前のこと」ばかりで、それを「情緒豊かに」描写しながら、しかも読者の予測されるような疑問・反論をこれも「嘘だっ！」とあなたは言うかもしれないと普通の会話調で随所に交え、久美氏の話の展開に逆にずっと引き込まれてしまう巧みさである。

かなりのページを割いて最初に説明されているのが、「帰りが遅いご主人の例」。飲み会・残業などなどの理由で深夜近くの帰宅を余儀なくされているサラリーマンはこの世に五万といることだろう。恐る恐る我が家のドアを開け「ただいま、、、」というご主人を待ち受けている「おそい！！（しかもこの文字はゴシック+拡大文字）」「今、何時だと思ってんの！」という奥さんの声。世のご主人の誰もが一度は経験しているであろう、この例を通して久美氏は「強化子の使い方が見事に間違っ（ここもゴシック+拡大文字）いる！」と切り込む。こんな例を出されたら、どんなに行動分析に興味のない人であっても、その先を読まずにはいられないだろ

う。

一体著者の久美氏とは何者なのか？ 慌ててプロフィールをめぐってみると、彼女のお仕事は列記とした「小説家」。そんな久美氏が行動主義に興味を引かれたのは、動物好きだったためだそうで、動物関連の本を読んでいるうちに行動主義のことを知ったのだと記されている。おそらく行動分析学会に参加したことも、もしかすると、そんな学会が存在することすらもご存知ないかもしれないという人物なのである（この点は未確認）。

岡山の学会では「歴代理事長が総力を結集して、一般向け行動分析の啓蒙書を出版する」というのが新執行部の大きな目標の一つとして切々と訴えられていたが、そんな折にこの久美氏の本が出版されたのも、余りのタイミングといえ、タイミングである。一般向けにわかりやすい行動分析の本を書くというまさにお手本のような本である。ただ多少の違いがあるとすれば、久美氏がこの本を書いた動機は「行動分析を広めることではない」。久美氏のゴールは至ってシンプルで、本書を読んだ人が「他人の些細な欠点を罵るひとではなく、他人の目立たない美点に光を当てるひとになって」もらうこと、そして読者と読者の家族に少しでも「ステキなことがたくさんたくさん起こる」ことなのである。

本書は「総力を結集されようとしている先生方」はもちろん、行動分析学会の会員の方々のみならず、人生に悩める輩の誰にも一読お勧めの良書である（個人的には、できれば、来年の学会で記念講演でもやっていただきたいと密かに思っている次第である）。

学会情報

常任理事会ヘッドライン
理事長 中野 良顯

1. 第 3 回常任理事会

第 3 回常任理事会は、第 21 回年次大会初日の 8 月 3 日に岡山大学で開催されました。

2. 会員数 (2003 年 9 月 16 日現在)

629 名 (一般 502 名、夫婦 8 名、学生 115 名、購読会員 3 名、賛助会員 1 名)

3. 第 21 回年次大会盛会裡に終わる

第 21 回 (2003 年度) 年次大会は、2003 年 8 月 3 日 (日) (公開行事) 4 日 (月) 5 日 (火) の 3 日間、岡山大学文学部 (長谷川芳典大会実行委員長) で開催されました。3 日間とも晴天に恵まれ、総参加者数は、昨年度の大会を上回る過去最高の 312 名 (一般 173 名、学生 139 名) にのびりました。たくさんの皆様にご参加いただきありがとうございました。長谷川芳典先生はじめ、岡山大学の皆さんありがとうございました。大会の参加報告など詳しくは大会 Web site をご覧下さい。

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psycho/member/hase/JABA2003/>

4. 第 1 回学会賞授賞

第 1 回学会賞は、厳正な選考の結果、論文賞は望月要氏と佐藤方哉氏 (「行動分析における“パーソナリティ”研究」 「行動分析学研究」第 17 巻第 1 号掲載)、実践賞は高畑庄蔵氏 (「支援ツール」に関する一連の実践) に決定いたしました。授賞式と授賞講演は、第 21 回年次大会 2 日目の 8 月 5 日 (火) に行われました。おめでとうございます。第 1 回の選考経験を踏まえて、第 2 回の学会賞の選考のための準備を進めております。

5. 再び ABA での研究発表をサポートします
- 第 2 回学生会員 ABA 参加助成事業について -
日本行動分析学会では、昨年度から、会員の

皆様の国際的活動をいっそう促進する一方策といたしまして、学生会員に対する ABA (国際行動分析学会) 参加助成事業を実施しております。今年度は第 2 回の実施となります。申し込みの対象となる大会は、2004 年度第 30 回ボストン大会 (2004 年 5 月 28 日から 6 月 1 日まで) です。ご発表予定の学生会員の皆様ふるってお申し込みください。(NL 編集部注:このニューズレターに募集要項と申請用紙を同封しています。ご利用下さい。)

6. 機関誌の発行予定

大変お待たせしました「行動分析学研究」第 17 巻第 2 号 (2002 年度発行予定) が、8 月末ようやく刷り上がり、9 月初めに発送させていただきましたが、皆様のお手元に届きましたでしょうか。2003 年度発行予定の第 18 巻第 1 号は、真邊一近新編集委員長のもとで一般論文 (4~5 編) を中心に編集作業が進められております。第 18 巻第 2 号は特集号を予定しており、「研究・実践における倫理問題特集 (仮題)」というテーマで、倫理委員会と協力しながら編集を進めることになっています。第 21 回大会のポスター発表者をはじめ、会員の皆様からのご投稿を心からお待ち申し上げております。

7. 住所変更やお問い合わせはメールでお手軽に

日本行動分析学会事務局では、新入会員の申し込みや会員の皆様の住所・連絡先変更などにつきまして、電子メールでもお受けいたしております。お気軽にメールをお送りください。アドレスは以下のとおりです。

yoshia-n@sophia.ac.jp

8. 公開講座のお知らせ

今回はありません。

前号記事の訂正

前号ニューズレター 31 号の 13~14 頁の「山口哲生さん」であるべき箇所を、いただいた原稿

の編集段階で、誤って「山口徹郎さん」と綴ってしまいました。お詫びして訂正いたします。

(ニューズレター編集部)

編集後記

今年は冷夏に続いて残暑が長引き、彼岸花も例年よりも一週間ほど遅かったようですが、会員の皆様にニューズレター32号をようやくお届けすることができました。今号には、第1回学会賞の授賞式など多くの企画のありました第21回年次大会について、いくつかの関連記事を掲

載することができました。また、各種委員会からのお知らせも、これから順次掲載する予定です。なお、学会賞(論文賞)を受賞された望月要・佐藤方哉両氏の「学会賞を受賞して」の記事は、次号に掲載予定です。次号は、12月に発行の予定です。(藤)

J - A B A ニューズ編集部より

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールかフロッピー(DOS)で、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。なお、ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、日本行動分析学会ホームページでの公開を原則としていますので、ホームページ上での公開を望ま

ない事項(例えば、電子メールアドレスなど)のある場合には、あわせてニューズレター編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部心理学研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
藤 健一
(e-mail: fuji@lt.ritsumei.ac.jp
電話 075-466-3193)